

"日本プロ野球球団による、球場管理、経営に対する提案"

"Proposal about stadium management of the Japanese professional baseball team"

1K05B227

山口 大

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 宮内孝知先生

【はじめに】

かつて、国民的スポーツといわれたプロ野球は衰退してきているといわれている。巨人戦の視聴率は低下の一途をたどり、ついには一部の試合の放送打ち切りという事態にまでなった。今年は春夏ともに甲子園大会は非常に盛り上がりを見せた。春は長崎・清峰高校の今村投手と岩手・花巻東高校の菊池投手の投げ合いで長崎・清峰高校が栄冠を勝ち取った。夏は、岩手・花巻東高校の菊池投手に沸いた大会だった。菊池投手のほかに、大分・明豊高校の今宮選手や愛知・中京大中京高校の堂林投手などプロ野球で上位指名を受ける好選手に恵まれた大会でもあった。決勝戦では日本文理高校は最終回に怒涛の粘りを見せるが、中京大中京高校の優勝で幕を閉じた。東京六大学野球も早稲田大学の斎藤佑樹選手の活躍により盛り上がりを見せている。しかし、アマチュア野球がこのような盛り上がりを見せる中で、なぜプロ野球の人氣が落ちているといわれるのだろうか。本論文では、ビジネスという側面からプロ野球にスポットを当て、今後のプロ野球のあるべき姿を探っていきたいと思う。

【プロ野球の歴史】

野球を初めて我が国に伝えたのは、1871年に東京・神田錦町の東京開成学校（現・東京大学）のアメリカ人教師として来日した、ホーレス・ウィルソン氏といわれる。936年に現在のNPB（日本野球機構）にあたる「日本職業野球連盟」（のちに日本野球連盟）の設立

により、本格的なプロ野球リーグ戦がスタートすることとなった。1949年まで1リーグ8球団の形態が続いたが、正力松太郎の2リーグ制の構想により、既存8チームが4：4の割合で分裂し、1リーグ時代は幕を下ろした。これが日本プロ野球界における第1次再編問題である。セ・リーグ、パ・リーグが誕生し、現在のリーグ戦の形になる。おう、長嶋が活躍したV9時代、パ・リーグ西武ライオンズが活躍した80～90年代前半。セパ・両リーグが群雄割拠のの戦国時代に入った現在にいたる。

【球団経営の実態と球場経営】

球団はこれまで赤字を計上しても親会社に赤字を補填してもらってきた。この構造から球団自体が「赤字経営を仕方ない事」と認識し、一般の企業経営とは掛け離れた感覚で経営してきた。球場経営は、球団の球場営業権の不保持による高額な使用料がかかっている球団が多くある。

【今後の課題】

日本のプロ野球が球場経営の改善を行う上で地域との関係構築は絶対条件である。球団と地域が一体となって改革を取り組んでいく事により、より安定した球団としての基礎を構築出来る。そして球団経営においても、安定した財源を確保出来、より積極的な投資を行う事が出来るようにする

【結論】

球場経営に優れた球団は他球団に比べ、球場経

営に対する意識が非常に高い。そして球場内のビジネスチャンスをしっかり理解し、少しでも現金化すべく日々努めている。また、そのビジネスチャンスをしっかりモノにする為に、地域との関わりを大切にしていけることが重要である。